

令和6年度 一般選抜中期日程 小論文
経済経営学部経済経営学科 人間健康科学部スポーツ健康科学科
出題の意図と解答の傾向

第1問

【出題の意図】

周南公立大学は令和6年度より3学部5学科となり、入学する学生達の興味関心や過ごしてきた背景はますます多様なものとなると考えられる。とりわけこの試験を通過して入学する学生にとっては、2学部3学科時代や旧徳山大学時代に入学した学生が先輩として在籍する多様な学生が行き交うキャンパスで過ごすことになる。また、入学後にはゼミ活動におけるグループワークなど学生同士が協働して学ぶ機会が多くあり、本学の特色でもあるCBL（community based learning: 地域との連携に基づく教育）においては学外者と協力して学びを深めていく機会も多く用意されている。

このような環境において事を進めていくためには多様な他者との「コミュニケーション」が不可欠となるし、他者との接し方について悩む機会も生じてくることと思われる。受験生たちはこれまでも様々にコミュニケーション能力を発揮しつつ成長してきたと思われるが、本問では改めて「コミュニケーション能力」について考えてもらいたいと考え、出題した。

課題文の著者の平田オリザ氏はこれからの社会ではコミュニケーション能力の在り方が「協調性から社交性へ」と転換すべきと考えている。筆者のこの主張を理解した上で、これに首肯するにせよ反対するにせよ、説得力をもって自身の見解を提示することを本問では求めている。

設問1

課題文が全体として「協調性から社交性へ」という視点から現代に求められる教育の在り方を論じている、という基本線を読み取れているかが狙いであった。

この設問では、日本の国語教育では「いい意見」「ユニークな意見」が評価されるのに対して、フィンランドの国語教育では多文化共生社会を背景として（個人の感じ方はバラバラだとして）様々な意見をうまくまとめる能力が評価されるといった、両国の特徴が指摘されるとよい。

「インプット→アウトプット」の対比を使って書いてよいが、「日本がインプットを重視するのに対して、フィンランドはアウトプットを重視する」では説明不足であるので、それぞれの意味するところやその違いのポイントを補うとよい。

設問2

協調性でなく社交性としてコミュニケーション能力を理解すべきだとする著者の主張をふまえた上で、受験生自身の見解が提示されているとよい。結論は著者の主張に沿うものでも反対するものでもよい。説得力を持たせるために、これまでの自身の経験・体験が提示されていること、その経験や体験が結論に無理なく結びつけて説明されていることが求められる。

【解答の傾向】（経済経営学部経済経営学科）

設問 1

- ・おおむね著者の主張を読み取れていた答案が多かった。なかでも、わかりやすい対比の言葉である「インプット→アウトプット」に注目し、その対比を用いて日本とフィンランドの国語教育の差をまとめた答案が多くみられた。
- ・一方で、この言葉に着目した答案の中には前述のように説明不足となっているものが散見された。著者によれば、「感じ方」（インプット）について、日本の国語教育では狭く強制されフィンランドではバラバラでよいとされる。また、「多様な意見」をアウトプットとしてどのように評価するかについて、日本では「いい意見・ユニークな意見を出すこと」が評価され、フィンランドでは「まとめること」が評価される。「インプット→アウトプット」を無理に使おうとしてこれらのやや複雑な対比のポイントがかえって不明確となってしまった答案も見られた。この課題文では「まとめる力」が重視される点がポイントとなる。
- ・「強制」「制限」を観点として対比した答案がいくつか見られた。例えば「日本ではインプットが強制されるのに対し、フィンランドでは一定時間内での回答が強制される」といったもの。
- ・課題文の表現を一部切り取って誇張的に使用してしまい、著者が「そこまでは言っていない」ような表現をしていた答案がいくつかあった。例えば「日本の国語教育では子どもたちは何を聞かされているかすら分からなくなってしまう」といったもの。
- ・具体例を用いて説明しようとしたものの、情報が不足してしまっている答案が散見された。例えば「フィンランドでは演劇がアウトプットに用いられる」といったもの。

設問 2

- ・明らかに著者の考えを誤解している答案もいくつか見られたが、少なくとも文字の上では著者の理解を正しく踏まえられていた答案が多かった。
- ・論述の中で誤解を露呈する答案や、言葉遣いが不明瞭なために最終的な意見が読み取れない答案もあった。例えば、筆者は「分かりあう」は使用するが、（他者の心・気持ちを）「理解する」という言葉は使用していない。結論では著者とともにコミュニケーション能力を「わかりあえなくてもなんとかやっていく能力」と捉えているのに、この力を「他者の心を理解するために必要」なものとして論じる答案がいくつか見られた。この「理解」が、「分かりあう」の「分かる」と同じ意味であれば、著者の主張と対立する論述となってしまう。「納得しないけれども、どのような考えかは理解する」といった意味であれば、説明不足となる。
- ・最初に提示したコミュニケーション能力の捉え方が論じているうちに変わってしまい、一貫性が失われてしまった答案が散見された。上の例もこれに類すると思われるが、おそらく自身の実感としては「協調性」を重視したいのに、著者の主張に寄せようとして失敗してしまったと思われる。限られた時間内で課題文に反対する論を仕上げるのは難しい作業とは思われるが、受験生の意見を尋ねているのだから素直に論じられるとよかった。
- ・提示された自身の経験・体験が論述を支えるものとしてうまく機能していない答案も見られた。また、経験・体験が単に例として提示されているだけで、コミュニケーション能力についての著者の捉え方

あるいは自身の捉え方やその理由と、どのようにつながっているのかが説明できていない答案もあった。

- ・この問が「コミュニケーション能力の捉え方」を尋ねているにも関わらず、論旨が「コミュニケーションは大事だ」という話になってしまった答案も散見された。

【解答の傾向】(人間健康科学部スポーツ健康科学科)

設問 1

日本はインプットを、フィンランドはアウトプットを重視するという点が、両国の国語教育の違いであると説明するだけの解答が多かった。グローバル・コミュニケーション・スキル(異文化理解能力)の養成という観点や両国の国語教育、特にフィンランドのそれに演劇的手法がなぜ用いられているかということを理解し、説明していた解答はほとんどなかった。

設問 2

設問 2 は、問題文を踏まえて「コミュニケーション能力」とは何かについて、受験生の意見を求めるものであった。

解答には、良好ではなかった人間関係や国籍・文化を乗り越え意見を言い合って良い結果を生み出すことが、コミュニケーション能力であるとするものが多かった。このため、交える自身の経験は、スポーツチームのミーティング、学校行事、アクティブラーニングという場などで話し合ったことを日記的に紹介するものが多く、コミュニケーションは大切なこと、という単純な結論に留まってしまい、「コミュニケーション能力をどのように捉えるか」ということに論理的に答え切れていない解答が少なくなかった。

設問 2 では、コミュニケーション能力の概念化のために、特定の事例を取り上げることを要求したが、上記のような傾向にあり、設問 1 の出来との関連から「筆者の理解を踏まえつつ」という点が不明瞭な解答が多く、全体的に低い評価となった。

さらに、不明瞭な文字、誤字、文字数の足りない解答は、減点の対象となった。

対策

小論文試験においては、まず問題文をじっくりと読み込むことが大切である。また、小論文には、必ず字数制限があるので、文章校正の習慣をつけておくとよい。これらの能力が大学入学後のレポート作成や定期試験に連動することを小論文問題は想定しているのである。

また、スポーツ健康科学科では、人間の健康やスポーツに関する時事問題等がテーマに選ばれる可能性が高く、これらのテーマに関係する新聞記事や雑誌記事、新書程度の難易度の文章を日常的に読み込み、限られた字数で内容をまとめるトレーニングをしておくとうい。

第2問（経済経営学部 経済経営学科）

【出題の意図】

人口減少という周南市をはじめ多くの地域が抱える問題について考えてもらうため、実際の周南市の人口ビジョンを基に出題した。自然動態と社会動態の両面からこの問題について考えるとともに、アンケート調査の結果等を踏まえて受験生の考えを広く問う内容になっている。本問は、本学科のアドミッション・ポリシーにもある通り、経済学や経営学への興味・関心、課題解決を行うための基礎的な思考力・判断力、自らの考え方や意見を他者に論理的に伝えるための基礎的な表現力、地域や社会の動向への関心などを多面的に測ることを意識して作成している。

設問1については、全体的な人口減少・少子高齢化はもちろんであるが、資料5より合計特殊出生率が全国に比べて周南市は高いが、資料4より出生数は全国に比べて少ないことが一つ特徴として挙げられるだろう。その要因としては、人口構成として主に子育て世代の数が少ないことなどが考えられる（資料2や資料6などから）。資料2からは同年齢層の男性と比べても女性の数が少ないことがうかがえる。また、そうした層が少ない理由として、社会減、特に県内県外ともに近隣の地域への転出が多いことが資料8・9などからうかがえる。こうした要素を資料から読み取って解答してほしい。

設問2については、設問1で人口の推移の特徴を読み取ってもらったうえで、自分で課題を設定し解決のための方策を考えてもらうことが主旨である。課題としては必然的に「人口減少（特に若年女性の減少）」となるであろうが、その要因がどこにあるのか、人口減少を食い止めるにはどういったアプローチが適切か、受験者の意見を述べてもらいたい。そのための糸口として、アンケート調査の結果を資料10・11で示した。これだけでは十分ではないかもしれないが、受験者独自の考えなども幅広く解答してもらいたかったので最低限の資料にとどめている。

【解答の傾向】

まずは問題文を正しく読み取れていない答案がいくつか散見されたことを指摘する。何が問われているのかよく確認して、問いに対応した解答を作成するようにしていただきたい。

設問1ではすべての資料を参考にして抽出される特徴を記述してほしいだったが、一部にのみ注目したような解答が多く見られた。自然動態（自然減）だけ、社会動態（社会減）だけではなく、やはり両面からの記述が求められる。一部の資料のみを参照するのではなく、資料全体からそれらの相互の関連性も踏まえながら、人口推移（人口減少）の特徴を読み取ってもらいたい。

設問2では、設問1で抽出された人口減少という問題に対して、資料11をもとに、交通利便性の向上、賑わいづくり、子育て支援、などの取り組みが必要であることを主張するものが多かったが、その中身が具体的に示されていないものもみられた。具体的な提案としては、道路網の整備や小売店の立地誘致、保育施設の新設や子供手当の給付などが挙げられていたが、その原資・財源について言及しているものは少なかった。ただ提案を行うだけでなく、その実現性を検討することができればよりよい答案になっただろう。また、ありきたりな提案ではなく、他自治体の取り組みを参考にするなど、解答者独自の視点があれば高く評価したが、そのような答案は数える程度しかなかったのが残念である。人口減少に限らず、こうした社会課題について日ごろから関心をもっているような学生を本学科としては期待したい。

第3問（人間健康科学部スポーツ健康科学科）

【出題の意図】

我が国の国際競技力を高めていくうえで、ジュニア期の競技者育成がどうあるべきかについて検討することは重要な課題である。既にトップレベルにある競技者がいつ頃に競技を開始し、トップパフォーマンスに至るまでにどれだけの期間を要したかについて知ることは、ジュニア期の競技者育成を考えるにあたって有益な情報を与えてくれると考えられる。そこで、池田ほか（2022）による『日本一流競技者における競技開始年齢およびトップパフォーマンスに至るまでの期間：競技種目差および男女差に着目して』から、日本人一流競技者の競技開始年齢、トップレベルに到達した時期およびオリンピック出場年齢に関する資料を作成した。また、参考資料として長期競技者育成モデルの表を用意した。これらの資料に基づいて、ジュニア期の競技者育成について解答させることとした。

設問1

日本一流競技者の競技開始年齢とトップレベルに至るまでの期間に関する図がそれぞれ示されている。本問ではこれらの情報を統合し、一定の傾向を読み解いていく基礎的な思考力・判断力が求められる。解答のポイントは以下のとおりである。

- ① 競技開始年齢とトップパフォーマンスに至るまでの期間に同様の傾向が見られる競技系統を適切にまとめられている
- ② 競技開始年齢やトップパフォーマンスに至るまでの年数など、グループ分けの基準を明確に示して説明されている

設問2

長期競技者育成モデルは、ジュニア期の競技者育成について、競技系統によらない一般的なガイドラインが示されている。それゆえ、競技グループごとに競技開始年齢やトップパフォーマンスに至る期間が異なることが考慮されていない。本問では、まず、こうした長期競技者育成モデルの課題に気づくことが必要である。そのうえで、特徴の異なる競技グループごとに、競技者育成の在り方がどのようにあるべきかについて、課題解決に向けた自らの考え方や意見を論理的に伝えることが求められる。解答のポイントは以下のとおりである。

- ① 競技グループの特徴に応じて競技者育成の在り方を変化させる必要性について述べられている
- ② 競技者育成の在り方について、妥当な意見が述べられている
- ③ 競技グループの特徴に応じた競技者育成の在り方について、独創的かつ有効な方法が提案されている

【解答の傾向】

全体を通して、文章の体裁は誤字・脱字が少なく、序論・本論・結論といった構成がはっきりと読み取れ、読解しやすいものがほとんどであった。一方、悪筆のために読むこと自体が極めて困難な解答も一部に見られた。

設問 1

概ね7つの競技系統を適切にグループにまとめることができていた。また、それぞれのグループについて、競技開始年齢やトップパフォーマンスに至るまでの期間の特徴がよく説明されていた。一方、図とは関係のない推論によって説明しているため、論理が飛躍している解答も少なくなかった。

設問 2

設問1の解答を踏まえていない、あるいは、設問1について触れているものの、その後の展開とは結びつかない解答が多く見られた。また、競技者育成の在り方について、一般的に妥当な意見は述べられているものの、その実態は表に示された長期競技者育成モデルを要約するにとどまっている解答がほとんどであった。競技グループの特徴に応じた競技者育成の在り方について論じようとした解答は極めて少なく、その中でも独創的かつ有効な方法を提案できたものは数えるほどであった。一部には、自身の体験のみを根拠として競技者育成の在り方を論じているため、説得力に乏しいと言わざるを得ない解答も見られた。